

# 暴走の海昏ければ

「一」

井本元義



白坂老人を紹介してくれたのは、書肆華房の社長の東田さんだった。彼は九十歳を過ぎた老人を、白翁と呼んでいた。白髪は歳に似ず豊かで艶のある光を放っている。張った顎は形もよく眼光は柔らかでもしつかりして品格があった。眉毛は長く少し垂れ下がっている。

私がある同人雑誌に、フランス十五世紀の詩人、フランソア・ヴィヨンの伝記と訳詩を気ままに書いていた文章を見て東田さんが本にしてくれた。それ以来の付き合いだった。本はたいして売れなかったが、一部の人には好評だった。

ここで少しヴィヨンについて述べる。

聖職者の息子でソルボンヌ大学の学生でありながら、酔っ払い恐喝乱痴気騒ぎの果て、人を殺して逃亡し強盗団で日々を過ごす。刑務所に入り恩赦で出てきてもまた捕まる。遂に絞首刑の判決を受けるもまた恩赦。その間に詩を書きながら評判になるが、パリから追放さる。パリに戻ってきたら今度こそ間違はなく縛り首だ。追い立てられてその後は消息不明になる。どこかで殺されて身元不明の死体のまま処理されたのだろう。死ぬ間際の彼の心に蘇ったのは、深い悔悟だったか、静かな諦めだったか、怒りだったか。

私はもう四十年も前になるが、パリ大学の短い講義に何回か参加したことがあるが、その時に住んでいた部屋が、パリ

でも古いサン・ジャックと言う通りだった。そこがヴィヨンの生活の場だったと知って彼に興味を持ったのだった。今ではカルチェ・ラタンの中心ではあるが、その頃ではまた大学の傍と言うだけでパリの外れだったろう。今はその地区の中心になっているパンテオンなどはできておらず、なだらかな丘だった。

私の棲家は路地を入った古い建物の屋根裏部屋だった。部屋代は安く静かだった。その部屋でたまたま手に取ったヴィヨンの詩が気に入ったのだった。

彼は勉強はあまりしていなかっただろうが、詩は小気味のいい音節と韻律でまとまっていて読んでいると心地よかった。生来の教養が感じられた。しかしなぜ彼はそんなに荒れ狂う生活を送らねばならなかったのか。満たされた静かな生活から覗く空虚な隙間に耐えられなかったのか。十五世紀の薄暗いパリの場末、いやそれなりに華やかだったのだろうか、人の心の底辺を流れる闇。そして私の若い頃の古いサン・ジャック通りの生活を思い出しながら、ついでにヴィヨンを書いたのだった。

東田さんは私に白翁の伝記を書いてくれと依頼した。白翁は若い頃はそれなりに暴れん坊だったようだ。別にヴィヨンの似ているわけではないが何か感じるものがあつたのだろう。仕事上の恩恵だけでなく東田さんは白翁を尊敬しており、たまたま私の本が気に入ったので結びつけたのだった。

白翁は若い頃はガリ版刷りの詩集や句集を出し、エッセイ集や七十歳を過ぎたころ出版した文明論集はある賞を受賞したが、地方の文人と言うことで控えめな人だった。その伝記は東田さんが発案し、九十歳になった記念にお礼を込めて小冊子にしたいということだった。白翁は自分で書く気はないし、そう専門的なものではなくていいので、彼の人生の記録に少し文学的な色合いをつけたいというものだった。私は承諾した。

白翁の邸宅は市内の南にある丘の中腹にあつた。辺りはこの二十年で開発され高級住宅地になつた。その高台のほとんどもともと先祖からの白翁の所有だったので売却により多大な資産になつた。

広い平屋だった。中心は絨毯が敷き詰められた洋広間でグランドピアノと様々な椅子が並んでいた。華美なところはないが質素で品があるわけでもなく、何となくまとまりはない。両側は生活空間で寝室や小部屋や倉庫になつている。広間の大きなガラスの戸の先は芝生に続いて市内が見渡せた。北西の方向で市内の中心部からは離れているので、小さな家が並んだ夜景はむしろ趣があり、また遠くに海が見え落ちる夕陽が美しいということだった。

私は昼間の三、四時間をそこに通つて白翁の話聞き、四日ほど過ごした。最初は東田さんが録音機を持って来たがその必要はなくなつた。大まかに書き、また通つて話を聞き逸

話で埋めた。

物静かな老婆が迎えてくれたが夫人ではなく通いのお手伝いさんだった。同居の息子が一人いるということだった。

話は青春時代の事になると弾んだ。逆に最近の事になると多くは語らず語りたくもないようだった。それはそれでいいと私は思った。

父親に連れられて過ごした極寒の内蒙古の思い出を話す時は頬が緩んだ。何も知らない幼年少年の伸びやかな日々は九十歳の老人の記憶の中でも柔らかな光の日々なのだろう。

例えば、その頃住んでいた村の近くを流れる清河の事だった。真冬はマイナス四十度になると河は凍る。急激に凍ると、氷は行き場所がなくなっていくなり盛り上がり爆発音とともににはじける。その爆発音の激しさを懐かしそうに語る。また一年のうちに温かい日は二週間ほどしかないが、その時に草原で転がって遊ぶ嬉しさ。

太平洋戦争が始まって帰国した少年は軍国少年になっていた。中学へ先輩軍人が訪ねて来る。その七つボタンの雄姿に憧れて十五歳の時に母親の反対の哀願も捨てて予科練へ入隊する。だがその頃はもう戦争も末期だった。予科練とはいえ、工場の作業ばかりである。

ある日工場の天井が崩落し命は助かったものの右足を潰される。口にタオルを詰め込まれベッドに縛り付けられ、麻酔なしで脚の指をただの鋏で切断される。即気絶するが、それ

よりも辛かったのは、その後赤チンを塗られただけで近くの小学校の宿直室に一月も放置されたことだった。

終戦間際で連隊の責任者は誰も来ない。毎日灼熱の中、天井だけを見つめて長い時間を過ごす。毎朝一度だけ村人が持つて来てくれる握り飯が生きるすべての頼りだった。痛み、辛さ、怒り、絶望を通り越したたの無の世界だった。死を黙って静かに待っているだけだった。死の不安もなかった。しかも終戦になってもそのまましばらくはほっておかれたのだった。

傷痍軍人として帰還するが、空虚な空つ風に漂うような日々。生きる目的はなく死ぬ意味もない。道端に転がったたの石ころに過ぎない自分。一応復学しても邪魔者扱いで早々に卒業させられる。私立の大学の復員クラスに潜り込む、勉強には当然興味はなくアルバイトに明け暮れる。そして酒と女と喧嘩の荒れ狂う日々。街の繁華街は庭だった。彼の松葉杖は立派な武器だった。予科練帰りだというと、チンピラは恐れをなして逃げていった。

それでも気持ちの通じる仲間が増えて、彼等と共に文学に目覚め詩を書き始める。心を誘う異国の風景や、魅惑的な女性に憧れるのは青春の男たちには当たり前だった。十九世紀末のフランスの抒情詩人、ヴェルレーヌたちの詩に感動して、二十歳のころ仲間とともに出したガリ版刷の詩集はちよつとした注目を浴びた。その頃の友人は生涯を通しての友人になった。戦後のロマン派無頼派詩人と嘯いて街を闊歩した。

ただ一人忘れられない友人を失ったのは長い間彼の心の奥に悲しみを残したままだった。ドイツのロマン主義の詩が好きな彼は、気持ちは優しいが、感情も豊かで激しい一番の親友だった。ある日は遠洋貨物船に乗りこみ一年間の航海へ出た。そして日本が見えてきた帰国の寸前に海に身を投げた。何故、と問うても答えはなかった。ただ気持ちはわかる気がした。彼は慟哭した。

終戦時の怪我と無の時間、親友の死、その二つは白翁の心の奥底に何時までも消えない深い虚無の塊を残したままだった。

詩や俳句で名前が売れ出しても、生活の足しにはならない。様々な仕事に挑戦し、どれもある程度は成功した。小さな裁縫学校を経営する未亡人のもとへ転がり込んだのが大きな転換期だった。経営を手伝いながら文学仲間と活動する日々は楽しかった。料理や邦楽や、さらに一般教養の科目も広げた学校が軌道に乗ってきた時に、未亡人は亡くなった。彼は初めて彼女を深く愛していたと自覚した。深い悲しみからは、時間がかかってもなかなか抜け出せなかった。

経営は彼の手に委ねられた。彼は新しい女性とは縁がなく、学校は年々発展した。彼の手腕でそれからの五十年で学校は短大になり、さらに看護学校なども経営する名門の学園になった。

学校の発展の過程の話から私の興味は薄れた。年譜を物語風を書くだけだった。七十歳の時彼は学園の経営から手を引

き後進に道を譲った。今は顧問として名前を残しているだけだった。

聞き取りは終わった。淡々と語る白翁の口調の奥には、戦中に見捨てられた大怪我の日、希望もなくなった死を待つて過ぎた時間が今も継続しているような気がして、その諦観に私は心打たれた。

小冊子が出来上がったのは、春も終わりの頃だった。私は刷り上がった本を届けに行く東田さんの車に同乗して久しぶりに邸宅を訪れた。白翁の邸宅の周りの桜は満開も終わりに近く、玄関の前は花びらの吹き溜まりになっていた。

広間から眺める市内の一望は春の曇った空の下に広がっている。これは私のプレゼントです、と東田さんは言った。白翁も満足そうに頁を繰っていた。芝生の先には散った花びらの塊が時折り噴煙のように舞い上がり、市内の眺めを霞ませた。遠くからオートバイの音が近寄って来て、家の前で止まった。息子だよ、と白翁が言った。

紺碧のヘルメットをわきに抱え、全身を黒革の繋ぎに身を包んだ長身で細身の男が入ってきた。頭を振って豊かな髪を揺らせた男は色白で、眼は女性のような優しさに潤んでいるが、顔の輪郭は引き締まって青年らしく、形のいい顎をしている。ただ少年のあどけなさを残している顔は、二十歳を過ぎていないと思われた。

「驚いたでしょう、息子は、当然養子ですよ」と東田さんは帰りの車の中で言った。

「名前は京二、時々自分では狂雉、きょうじ、と言ったりする、狂った雉だと嘯いている、だがいい青年ですよ、いろんな才能に秀でていて、そのうちにゆつくり会うことになりま

すよ」

帰り際に玄関で見たオートバイは初めて見るものだった。重量感のある漆黒の鉄の塊は、美しい彫刻の様だった。いやそれは生きていた。今まで蹲っていた古代神話の勇士がいざ立ち上がろうとする瞬間を思わせた。桜の花びらが数片その上に散っている。私はもともとオートバイには興味はないし、暴走族とは言わないまでも、それを操って疾走する姿には興味はなかった。だがその時私の心を捉えたのはなぜか哀しみに似た甘い感情だった。先刻の美しい青年のせいだった。

私の気持ちを通じたのか東田さんが続けた

「あのオートバイは、ハーレー・ダビッドソン一二五〇とい

います。多分、五百万円くらいでしょう」

私は興味なさそうに黙っていた。それからまた白翁の話になった。最初の恋人の未亡人が亡くなつてから、白翁は他の女性には興味を失つたようだということがあった。東田さんもまたその頃は白翁と知りあつては

いなかった。

それから学園が大きくなり始めても経営が苦しいこともあった。世間との折衝は一種の戦いでもあった。競争相手もいたし、政治家や官庁との交渉では無理ばかり押し付けられた。しかし決して弱音は吐かず、その相談相手もいなかったが彼は挫折せずに一人で戦い続けた。その頃の印刷物を一手に引き受けていた書肆華房は壮年の白坂氏を応援していた時代があり、それ以来お互いの信頼は固くなつたということだった。東田さんはその後も会社を大きくはせずに白翁を傍から支えている。

国立大学の定年教授、有識者、警察署の定年者を入れたりして学園の経営層は充実して、世間の評判は高まつていった。ただ、もともと無頼派の詩人がこのまま地方の模範的文化人で終わるわけはなかった。

東田さんだけは秘密の話を知っていた。時々白翁は姿をくらました。遠い地方や異国の小国へ出かけては、荒れ狂つた抑えきれない熱情を発散しなければならなかった。身についた教養や押し付けられた礼節や社会的な地位の重みを拭い捨てる空間が必要だった。彼はいくつもの秘密の淫靡な場所を持つていた。

戦時中の怪我の絶望さえ感じないほどの無為の一か月、親友と愛する女性を失つた限りなく深い慟哭、その時の記憶は何もない日常に突然大きな口を開いて彼を襲つた。それに引き込まれるともう再起は不可能だった。壮年のまた初老の時

も、それらは欲情の噴出でしか賄えきれなかった。それもで

きる限り醜く汚染された空間で、自分を貶めねばならなかった。

私はその秘密の話をも東田さんが打ち明けてくれたのに感謝した。そして評伝の後半を書くのに面白さを感じなかつた理由を知った。口外できない闇にこそ真実と面白みがあったのだ。しかしそれはもう遅いし、また私の手で明らかにすることもできない。なぜなら白翁の秘密に私はこれ以上ない親近感を持ったのだから。

次第にその秘密の話が他の経営層に知られたらしいということになって、それが世間に広まる前にひそかに白翁は学園を去った。顧問と言う名だけは残して二十年が経った。

「シャトー・マルゴというワインを知っていますか」と突然東田さんが聞いてきた。

「名前だけは知っています、一度味わってみたいとは思っています」

若い頃に読んだエドガー・アラン・ポールの小説に「極上のシャトー・マルゴを荷車一杯に積んで・・・」という一行があった。荷車を引くのが真犯人だったかどうか忘れたが、何かそこだけ記憶にある。

「時々、白翁が何人か友人を招待してご馳走してくれるのです。その時のワインがいつもシャトー・マルゴなのです。今度頼んでおきますからその会に来ませんか」

私は喜んで参加したいと言った。

「白翁は若いころからヘミングウェイが好きだったようです。彼が貧乏派遣記者でパリに住んでいたころ、ヴェルレーヌが住んでいた下町の部屋を借りていたことを知って、白翁は喜んでいました。その後小説が売れ始め、金持ちになってからパリの高級ホテル・リッツなどで好んで飲んだワインがそれらしいのです。ただ白翁はその話を楽しんでいただけですが」

その会を「マルゴの会」と名付けて白翁に承認を貰ったのは東田さんだった。そこには、いつも七、八人が集まって食事をする。その食事前に誰かが一時間ほど自分の専門や興味のあることの卓話をするのがきまりらしい。メンバーは一応の知識人たちで多士済々に渡っている。東田さんがその人脈の源らしい。

ある写真家は、女性の裸体が専門だが、背景はいつも廃墟だった。壊れかけた旅館の部屋、使われなくなった陶磁器の窠跡、古民家の台所、瓦解した神社の跡、今は無人島になって残された教会の廃墟など、用意したスクリーンで作品を紹介した。唯の狼藉と芸術の境が彼のテーマということだった。

元医学部の教授は若い頃研究に携わった、スエーデンが開発した世界で唯一のガンマーナイフという器械を映像で説明した。昔は脳にできた腫瘍は頭骸骨を切って開けて、脳味噌から切り出さねばならなかった。失敗すると後遺症は残るし、手術が成功してもリハビリに数か月はかかる。このガンマーナイフは、頭の中の腫瘍にガンマー線の焦点を合わせ焼き切

る。二泊三日で退院できる。費用は二百万円かかったが、数か月の入院とリスクを考えると安い。それを日本で最初に導入した病院は悪化した経営を再生させた。今は保険で安く手術ができる。ただ器械の輸入価格は五億円。出席者はそれぞれ自分の身になって考えてしんみりしていた。

天文学者は宇宙の誕生を分かりやすく説明したが、美しい天体の映像に浸りながら誰も分かったような分からないような不思議な気持ちになった。続けて紹介した、北斗七星の水汲みの話は分かりやすかった。世界で二か所しかない緯度の海岸で、北斗七星の柄杓が動きながら水平線の水を汲むのが見られる。それはこの地方だけで、自分が北斗の水汲みと名付けた。

フランス語で俳句を作ってコンクールで評価され、フランスへ招待された詩人Tは旅行の写真と俳句の講義をした。東田さんの説明は尽きなかった。

「他にも医者、弁護士、絵描き、料理人、珈琲の専門家などがそれぞれの経歴を語ります。珈琲の彼は、毎年エチオピアに豆を買いに行きます。現地では少女たちと一緒に木から豆を摘むのです。真っ赤な豆や明るい少女たちの写真はきれいだっただ。テーマは何でもいい、それなりに面白い。あとの食事も楽しみだし、貴方もいつか何か話したらいいですよ」と彼は結んだ。

私は何を話すか迷ったがまだ先だと覚悟して楽しみにした。珈琲買い付けの男の話は特に私の興味を引いた。やはり私

の好きな十九世紀の放浪詩人アルチュール・ランボーが文学を捨てて砂漠のようなエチオピアに住んでいたのだ。その一年の無為の生活で彼は何を語ろうとしたのか、アフリカの闇に蹲るランボーの沈黙ほど美しい詩はない、と私はある文章で書いたことがある。それが私の文学のテーマだった。多分彼は詩人の私の知らない話をしてくれるだろう。

私が最初に参加したマルゴの日のテーマは能だった。講師は髪を整えたがしりした体格の男で和服が似合っていた。名刺には「能楽師 大鼓（おおつづみ）方 高安流 重要無形文化財保持者 村田太郎」と書いてある。先年のヨーロッパ能公演の報告ということだった。

「公演のフィルムを流しますが、全部はできませんし、外人相手なので全部は演じていません。よほど理解のある人以外は長いので退屈するでしょう。本当はその退屈な、夢幻の時間が大切なのですが。それはフランス・ロワール川の上流の古城で行われました。ほんのりとライトアップされた古城を背景にした薪能でした。曲目は三題、葵上、井筒、綾鼓です。今日はその一部分になります」

能楽師は自らは舞はしないが、舞台の構成や流れを若手に指導すること。知らない人もいるかもしれないということで、話の内容を説明することから始まった。私の好きな演目ばかりだった。

壁側にスクリーンが用意されていた。芝生へ続くガラス戸

は開け放たれていた。涼しい初夏の夕方の風が吹き込んできた。参加者は誰もが黙って市内を包み始めた夕闇に見入っていた。曇った日だった。落ちていく太陽は見えないまま、夕焼けははつきりせず、薄い雲の背後を赤黒い錆色の空が覆っていた。不吉な色は始まる能の悲劇を予感させた。

白翁は一段高くなった台座に置かれた回転式座椅子に座っていた。その片方の肘掛に狂雉が女性のようにしなだれて身をもたせかけて座っている。参加者はそれぞれ気ままに床に座ったり傍の椅子に腰かけたりしている。能楽師が大鼓を打って長い静寂を破った。外は闇に包まれた。

何度も見えた能ではあるが、初めて見る背景の古城と薪の炎に揺れる陰影は見事だった。時折り映される夜空の暗黒はむしろ輝いていた。そこを能管や小鼓や大鼓の響きが貫いた。謡曲の朗々とした声は悲哀を秘めながら力強くあたりを領した。アップした西洋人の横顔は緊張して、目は深い藍色の空洞になっていた。

「多くは六条御息所の般若に一番感動したと言っていましたね。怨念の鬼気が折伏されて去っていく時、急に悲しみの表情に変わったのが哀れで、涙ぐんでしまったと言った女性もいました。一つの能面であんなに表情が変わるのかとも。

井筒では煌びやかな衣装と無表情の面に深い悲しみを味わったと言ったのは、品のいいお婆さんでした。

ただ、綾鼓で高貴な殿上人に秘かに恋を抱く、醜い老人の悲しみはあまり理解されないようでした。それは仕方がない

のでしようか、それほど美しくないのかな。

全体の幽玄の世界だけでなく、彼等が能面のそれぞれの変化をしつかり見ていたのに、こちらも驚きでした」

食事は芝生のテーブルに並んでいた。その日だけ料理人やその手伝いを雇っているらしい。ローストビーフやサラダやピザなど特に手の込んだものではなかった。その日は料理よりも卓話の残りで話はずんだ。公演の随行人数は、収入は、能を舞うのは芝生か床を造作するのか、フランス国内の放送は、評判は、など質問は尽きなかった。白翁も今日の卓話には満足したとのことだった。

狂雉はいつの間にか姿を消していた。私は彼が能にどんな感じを持ったか聞きたかったができなかった。それよりも、私も迂闊にシャトー・マルゴを味わうのに最初の一口を嘔みしめようと思っていたのを忘れて、気が付いたら何杯かを喉に流し込んでいた。確かに美味しかった。それは深い洞窟の奥に長く隠れて潜んで、いつまでも秘密を守ろうとしている味のような気がした。一種の甘い黴の匂いかも知れない。最後に能楽師が謡曲を披露して会は終わった。邸宅の周りの林は深い闇に続いていった。

「三」

私は今年で七十八歳になる。四年前にある癌を発症し手術



のあと一か月ほど入院生活を送った。その後三か月ごとの検診を三年続けて、それを終えてから一年になる。今はほぼ完治だろうが、再発するかどうかはまだわからない、と医者は言った。

退院日の解放感はいびり虚しいものだった。力のない足取りで病院を出たが、目の前には何もなく光は空虚に満ちていた。もともと生きる意味を深く考えない人生だったので、その解放感私の生きる意欲を根こそぎ取り去ったようでもあった。

妻とは長い間別居していた。心臓が悪く病弱だった妻は、結婚して子供のいない娘の家で生活していた。妻も娘もそれが安心だろうと私が勧めた。妻も娘も私の病室には滅多に見舞いに来なかった。私はそれも望んだ。

独り住まいの私の日常生活雑事は週に二回通ってくる家政婦で事足りた。時折りの集まり以外は、毎朝散歩し夕方は行きつけの店で呑み、家では音楽を聴き読書をし、頼まれた雑文を書き翻訳をした。これから先の希望はなく考えもしなかった。

私はある女子大学の仏文科の教師を四十年間務め定年で辞めた。教えることに生きがいを持っていたわけではないが、授業は真面目に続けた。将来に夢を持って仏語を勉強する女学生もいたが、ほとんどは単位の取得だけでよかった。私もそれ以外に生活の手立ては持たなかった。

教職についてからの最初の頃の楽しみは、女学生と毎日会えることであつた。若かつたからそれはどうしようもない。香水の混じつた体臭、肌の色、手足や腰や肩の形や、派手な服や爽やかな服、声、風になびく髪、それらと触れ合うことは楽しかつたが、時には込み上げてくる欲情に耐えられなくなり煩悶することもあつた。私は多くの若者と同じように町へ出て高まるものを静める術を学んだ。

若い男の教師を雇うことは最初は経営陣に敬遠されていたが、年寄りばかりの教師はまた人気がなく、その合間に私はうまく就職することができたのだつた。嫌な事で我慢することも多かつたが、私は人生の半分をそこで過ごすことになつた。そして女学生の生態に慣れてきても、そこで私の感情が鈍感になることはなかつた。私の歳と共に受ける甘い感情は形を変えただけだつた。

教師の職についてから四年ほど経つた頃だろう。私はパリ大学の夏期講座に登録した。短期の講座で各国から集まつた学生が任意で講習を受けることができる。私の心は晴れやかに踊り、得たいものは何でも手に入る自信しなかつた。友人たちと語りワインを飲み踊り公園や路地を散歩した。空はいつも晴れていた。

しかし今だから語ることができるが、私を襲つたのは、あの一瞬のつむじ風、いや暴風雨、いや窓ガラスを軋ませる渴いた冬の風であつた。目の前を流れる雨水を私は飛び越え

ることも、足を踏み入れることもできずに立ちすくんでいた。私は枯葉一枚が落ちる音にさえ堪えられないほど弱つてしまっていた。大袈裟に言っても私は恥じない。私は一人の女性に出会った。それは運命と云つていい出来事だった。

ある小さな教会の音楽会で私の隣に夫婦が座った。終わってから私たちは近くのカフェでワインを飲んだ。夫は同郷の医者で振舞も立派な年上の男だった。彼は私の大学を知っていた。夕食に招待されるのは当然の成り行きだった。私の部屋とは違つて彼らの潇洒なアバルトマンは花に包まれてピアノがあった。食事のあと、妻の由紀子がシヨパンのノクターン二十番を演奏してくれた時私は感動して涙ぐんだ。

私は彼等に会うのが楽しく頻繁に訪問するようになった。彼等も歓迎してくれた優雅な時間だった。

だが私は帰国の二週間ほど前から訪問を止めた。気が付くと、言葉の通りに私の胸は張り裂けんばかりに痛んでいた。私は無意識を装つて、私の感情の秘かな揺らぎを胸の奥底に押し込めて隠そうとしていた。気を緩めるとそれは濁流のようにほとばしり出ることは間違ひなかった。私は怖れていた。

初め私は恰幅のいい夫に抱かれ衣服を剥がされ愛される由紀子を想像して、少しのジェラシーを楽しんでいるつもりだった。だが私は次第に正直な感情を失つていく自分に気づくことになった。弱つた意識の中で私は自分が何を隠し、それを意識しないように自分を律しながら、その上にさらに自分

が打倒されて行くのを知らねばならなかった。私の心の奥底は丸裸にされ、隠していたものが露出して独りおののいていた。救いはどこにもなかった。私は由紀子への恋の感情に打ちひしがれていた。だがどうすることもできないのは分かっていた。

人間性や理性という言葉はあるがそれがどんなものか分からない。まず私には眼を閉じると由紀子の後姿が浮かんでくる。髪、肩、背中、腰と足の形、それに触れようとしても得ようとしてもできない。決してそれは均整の取れた美しい希臘彫刻のような後姿ではない。肩、腰、足などのやや悪いバランスは私にしか感じられない魅力だった。誰も、夫も本人さえもそれを知らないだろう。私のためだけの姿なのに、なぜ私のもではないのか。顔の表情と胸のふくらみは気高すぎて恐ろしく思い浮かべることができない。私は単純に由紀子の体そのもの、存在そのもの、その動き、生きている様、彼女の息の流れ、衣服からそよぐ空気の流れ、すべてに恋をしてしまった。一度意識してしまうともうそれは抑えようがなかった。

私は毎日大勢の女性に囲まれその空気に触れ匂いを嗅ぎ見つめ女性のあらゆる身体を知っている。彼女はすべてのを持っていて。

私の想いは彼女の中にしかない。私は彼女の全てが欲しい。誰も知らない彼女の中にしか私の想いは遂げられない。私の欲情は聖水のように迸り彼女を貫ぬかねばならない。

私はそれを告げるわけにはいかない。そしてそれは決して叶えられるものではない。私はただ自分の中の闇に蹲るしかない。私は立っていることも歩くこともできないほど困憊していた。周りは乾いた空疎な風の音しかなかった。私は一日中ベッドに横たわって動けなかった。

パリの闇はどこに足を踏み入れても猥雑なことには事欠かない。そこで私は荒れ狂った夜を何日も過ごした。それでも私は傷を癒すことはできなかった。傷口に血が流れば消毒されいずれ枯渇する。だが時間が過ぎる度に私の傷は深く生々しくなった。そしてその傷跡は生涯そのまま残ってしまった。忘れようとしても決して消えなかったばかりか、傷の裂け目はいつも私の脚を掴みその深淵に引きずり込もうとした。私にできることは、それを忘却の泥の川に流し、無意識の底に閉じ込める事だった。だがいつかそれが蘇ってくるに違いないという予感、秘かな望みでありながら私を苦しめ不安に苛む原点だった。

苦しんでいたある日、私の教え子の一人がたまたま旅行でパリに来た。彼女は、先生、案内してご馳走してくださいと言った。部屋に案内して私は彼女を凌辱した。彼女は拒否しなかった。帰国すると彼女は私を待っていて妊娠したと告げた。私は彼女と結婚した。

人生の半分以上を過ごした大学の仕事は、その時その時は意味はあったが、過ぎてしまえば記録以外は何も残っていない。

い。経営層との軋轢や教授たちの派閥争いや社会を騒がせた不祥事なども過ぎ去ってしまった。今は適度な時間潰しとしか思い出せない。私自身の学会の発表なども注目を浴びたこともあったが今考えると瞬時に過ぎない。

私事では子供が生まれ育ち、家族が病気になるたりして、それなりの出来事で時間は過ぎた。私は家内をいつも愛おしく思っていた。たまに一緒に小さな旅行をすることもあったが、一度心臓の病気で倒れてからはしなくなった。そして妻に昔の旅行の事を話しても、思い出せないということが多くなった。

初老というか、六十歳を越えたころ人生を振り返ってみて暗然とすることは誰でも経験することだろう。私は一応教育者としても、人生は目的に向って進むことに意義がある、困難はチャンスだ、などという説教はしなければならないだろうが、その気は全くない、失せてしまっている。自分はただの厭世者なのだろうか、それとも人生の真実を見た哲学者だろうかなど、不真面目に考えたりすることもある。

七十歳での病院の一月はゆっくり考える時間だった。考えるというよりは、ぼんやりと自分の時間を振り返って見るだけだったが、やはり私は真実を知ったと、また不真面目に確信した。死に怯える不安は確かだったが、諦めてすんなり苦しまずに死ねばそれ以上のことは望まないと決めると楽になった。

自分の生きてきた肉体の成長や変化や変成や衰弱などを振

り返ることがその一か月の大切な思考時間だった。私の肉体と共に生きてきた、性という欲望、私の肉体の中をその時々、の性がどんな変化で流れていったか、いや性の奔流を私の肉体がどんな風に流されて行ったか、目の前に訪れつつあるかも知れない死を前にして私はその思いに耽った。

誰でも同じように青年の欲情は、女性の神秘に愚弄されて一気に発散する。青空に向かってても夜の闇に向つてもその噴出は解放であった。誘蛾灯に導かれてさ迷い、夢の中ではさらに深い夢の旅の終着地を求めた。山の空気や海の潮の香りに若者の精は混じって匂った。薄暗い街角でさえそれは割れたガラス片のように美しく煌めき、あるいは踏みにじられた花だった。爆発寸前の欲望は、それが瞬間に消えていく快感を予感している。様々な女性の表情やその場の空気の記憶は五十年経つても消えない。

しかしここで、私の肉体の中の性の遍歴を顧みると、私の平凡な教師の生活と全く異なることを告白しなければならぬ。

私は生涯で一度しか恋をしていない。その記憶は深い。相手がそれを知らなければただの恋で、それは愛と呼べるものではない。四十年前に私に恋をさせて、またどん底に投げ込んだ女性はそのことを知らない。私はどん底から這い出して明るい光を求めようとしたのではなかった。私は薄暗いパリの街の舗道の石をはぎ取り、そこに流れる濁流にさらなる絶

望を迸るように流し込んだのだった。

私はずっと妻を愛して優しく接して抱いてきた。しかしその性は私の肉体から溢れる欲情とは関係なかった。私は平易な仕事と愚劣な世間、学校の仕事の日々の中でしばしば憂鬱の虜になった。表面上は物静かな代わり映えのしない教師という顔をしていても、私は胸の奥に膨らんでくる空虚なものを感ぜずにはいられなかった。それは理由のない怒り、憂鬱、それは実存の不安という言い尽くされた言葉では説明できないもので、私の許容を越えようとした。

かつての傷跡の深淵が口を開いていた。逃げることも立ち向かうことも、私には何も制御ができなかったのだ。ただそれを激しい欲情の噴出として処理しなければならなかった。私は度々、秘密裏に狂った時間を持った。一人の小旅行をし、その都度そのような淫猥な場所を見つけた。安石齋の匂いは私の日々の大切な一部だった。それは何年も続き強弱を繰り返し習慣となり私の身体の一部になった。

達観した人は私を愚弄しそれはただの性欲の処理に過ぎないというだろう。だが私にはそれは必要不可欠のものであり、生涯の伴侶だった妻への愛情とは位相が違う。繁華街のネオンの隅の隅の猥雑さは低劣で醜いものでなければならなかった。パリの悲哀が私に棲みついているなどと気障なことは言わない。それはもう忘れたことだと私は思い込もうとした。

七十歳の病室暮らしが私の生を一変させたのは当然である。

医者は生存率については私になにも言わず一応完治したと言った。私に不安は残ったままだったが、どちらにしろ死の準備、いかに死に行くかを考えねばならない歳になっていた。

過去の事は反省や悔悟があつたとしても、安心して思い出し語り懐かしむことができる。屈辱や怒りや絶望は甘い映像で帰つて来る。しかし老年の今、かつての欲情の記憶がいかに激しく蘇つてこようとしても、己の存在の不安など、死が眼前の現実であることを認識すれば急に萎んでしまう。昔の欲情の爆発は、生の不安と存在への怒りではなくセピア色のフィルムに平坦な影を落とすだけになった。

味気ない人生になつたと思つた。体に力を入れて深呼吸しても力はかつてのように満ちてくることはなく、どこかの針孔から霞のように消えるばかりだった。少しずつ歩き始めりハビリに時間をかけて元に戻りかけたが、体は涼しい弱い風に包まれてやつと立っているようだった。

#### 「四」

狂雉こと、京二が生まれた時、父親は私大の文学部の助手をしていた。西洋古典学の専門教室で、ラテン語の研究でデカルトなどの著書を読んでた。また日本のキリシタン時代に日本人用に書かれたラテン語の教科書や聖書を解読したりしていた。長崎の田舎に伝承されているオラシヨウ唱歌の分

析もその一つだった。

その父、すなわち京二の祖父は国立大学のやはり文学部で専門は古代西洋哲学ということで研究の中心はプラトンだった。古代ギリシャ語の英訳本の間違いを指摘し誰もが認める権威者だった。その時は定年を迎えたばかりだった。戦災を免れた旧家には煉瓦作りの蔵があつて彼の書庫になり、定年後はそこに閉じ籠っていることが多かった。痩せて長身で顔はいわゆる厳格で、上品な振舞だったが、他人から見ればただの傲慢さに見えた。

京二の父はその親の言いつけ通りに文学部に進み、ギリシヤ語とラテン語の歴史推移を研究させられた。やはり長身で痩せていたが色白で優しい表情をしていた。気が弱く優柔不断な性格で幼い頃は祖父の叱責を受けるのが日常だった。

その妻、京二の母親は大学の後輩で同じ研究室に入ってきた。土地成金の家庭の派手な娘だった。父の前では質素になり好意を寄せてきた。純朴な父は素直に受け入れた。祖母は成金家庭の娘を好まなかったが父は珍しく頑固で意志を通して結婚した。

息子夫婦と同居していた祖父母は生まれた京二を溺愛した。母は体形が崩れると言つて母乳をやらなかった。これ幸いとミルクを作り飲ませるのは祖母の仕事だった。京二は祖母の膝を追いかけた。母は安心して外出したが、それは祖母の無言の圧力と軽蔑に耐えられないことの一つだった。趣味の会合などで母の帰宅が遅くなつても京二は安心して祖母の寢床

で朝を迎えた。父は両親のする通りに従って不満はなかった。京二に熱が出たりして体調を壊すと、その看病の仕方は諍いの種だった。祖母は母の看病が下手だと言って非難した。熱が引くと祖母は自分の手当てを自慢し、眼は母に対してさらにきつくなつた。

敵めしい顔の祖父さえ京二を抱く時は頬の緩みを恥じなかつた。風呂場に入れるのは定年後の祖父の大事な日課だった。風呂場に響く笑い声が消え、祖母が服を着せてから、そこに母が待つていれば、母に渡された。

京二が三歳になると、祖父が面白がって希臘文字を教えた。α(アルファ)、β(ガンマ)、γ(デルタ)、δ(イプシロン)などと声を出して読むと老人は喜んだ。

それなりの平和な生活も終わることになった。インフルエンザをこじらせて父が肺炎を起こして死んだ。京二は四歳になつたばかりだった。

母は京二を連れて実家へ帰りがたがでできなかった。実家は仕事が失敗して破綻していたし、また義理の両親が承諾するはずはなく、彼女にとっては数年先に彼等が死ぬのを待つしかなかつた。苦痛の同居生活にしばらくは我慢したが彼女にはそれ以上でできなかった。気を持ち直すとの外の世界に花と光が満ちているのが見えた。彼女は子供を置いて出奔した。

住み込みで来た家政婦は不器用で動作も鈍かつたが、人のいい優しい女性だった。京二は彼女をママと呼び、母親を忘

れる事は早かつた。ただ気付かないうちに欠落感を感じていたのだろう。幼くして癩癩をしばしば起こした。嫌いなものが食事に出るとお椀をひっくり返した。誰も怒らず却って優しくなだめるのが常だった。優しい慈しみに満ちた老人達に見つめられて不満はなく居心地はいいはずだったが、その居心地の良さが理由のない怒りになった。

小学校に入つて、女子の髪の毛を掴んで引き回して虐めたので、教師が祖父母に注意したことがあつた。祖父母は相手が何か気に入らないことをしたのだと言つたが、少しは慌てた。祖母は感情が和らぐようにと、昔自分が熱中したピアノを習わせた。性分に合つたのかピアノは好きなようだった。少し褒められると有頂天になつて続けた。上達は早く宿題の練習以外でも自分でピアノに向かうことも多かつた。ピアノ教室の発表会には両親が参観した。若い親たちに混じつて盛装した姿はやや奇異だった。

少年期から思春期にかかるとやはり両親がいないのは淋しいことだった。哀しみよりも、理由を問うよりも得体の知らない空虚感が体に沁みるのを感じただけだった。背が伸びて体が疼くようになり、テレビで見た空手を習うことにした。真真事に過ぎなかつたが筋肉の成長のためにはなつた。美少年の心の歪みとは反対に四肢はしなやかに伸びた。汗の匂いは心地よかつた。

中学校になりテストの成績が発表されると結果の順位は全年年で一番だった。祖父母は表情を崩して喜んだ。食卓に好

きなものを並べ、父親の思い出を語りその優秀さを褒めた。だが彼は次のテストで、わざと簡単なミスを繰り返して順位を下げた。教師がそれを知っていて、なぜそうするのかを不思議がっているのを京二は分かっていた。

祖父は極端な失望の様子を見せ、反省して期待に応えようと京二が次に努力するのを待ったが、彼はそうしなかった。祖父の顔は次第に元のように渋くなり、会話は遠のいていった。学校でも彼は授業をなるべく理解しないようにした。外では空手道場とピアノ教室が憩いの場所で、家ではピアノの前か部屋に閉じ籠った。

祖母が手配して家庭教師が来ることになった。優秀な苦学生ということとで授業料は高かった。彼は最初は緊張して学生服で現れた。短い髪の毛はニキビを残して醜くかった。腹が減っているのか出された茶菓子をすぐに食べた。京二は自分の分を差し出した。

京二からの質問はなく教科書を先に進むしかなかった。それも理解は早かった。週に一度の授業だったが勉強はお互いにすぐに飽いた。ある時ピアノの話になったので、京二が練習曲を弾いて聴かせた。学生は喜んで翌週に高校時代の音楽の教科書を持って来た。片手で鍵盤を叩きながら京二に教えるを乞うた。古いロシア民謡ということで、「ともしび」とか「黒い瞳」とか「バイカル湖の畔」とかいう曲は京二も気に入った。雪に埋もれた小屋の灯の下の、黒い瞳の少女の想像は心を落ち着かせた。互いに親しさは増した。学生の汗の匂

いも嫌いではなくなった。

ニュースが桜の開花を告げていた。来週に入試を迎える最後の授業の日も、ピアノで始まった。京二は教科書からシューベルトの「菩提樹」や「セレナード」を弾いた。暖かな雨の続く日で音は曇っていた。傍に立って聴いていた学生が言った。

「君の指は白くてきれいだね」

さりげなく冗談風に言ったつもりだろうが、やっと口に出したという風に震えていた。そして鍵盤の京二の手に自分の手を合わせた。

「試験は落ち着いていれば君の実力だと大丈夫だから」

授業を始める前にそう言って彼は机に座った。取り留めのない話をしながら彼は落ち着かず、立ったり座ったりしていた。そして意を決したようにいきなり京二の横に座った。短い沈黙のあと、京二の耳元に顔を近づけた。身体に手が差し込まれても京二は動かなかった。嫌ではなかった。なぜか彼が可哀そうだという同情心が起こって来てそれが甘い感情になってくるのをそのままにしていた。

高等学校に入ってから空手道場に通うことが多くなった。筋力がついて背が伸びたが体形はそのままだった。組み手で他人の肉体を打つ拳の感触は心地よかった。相手の肉体に拳が埋没するようだった。また打たれる時の痛みは、強い清冽

な力を己に取り込もうとする一つの快感のようだった。鍛える拳には血が滲んだ。

痺れて傷ついた手でピアノを練習することは、美しい音とメロディを求めようとするさらなる努力に酔うことだった。まだ女学生のピアノ教師がそれを分かってくれているのが嬉しかった。

不遜な態度の美青年の彼に、諍いを挑んでくる同級生は誰もいなかった。そして何時も無口だった。

入学して一年経ったある日、家庭教師と公園で出会ったのは偶然だった。まだ寒さが残っている頃で彼は毛糸のセーターを着ていた。昔よりお洒落になっていた。桜の花びらが散った雨上がりの水たまりを気にせずには彼は近寄って来て手を差し伸べた。嬉しさと顔はほころんでいる。水がはねて京二のズボンを汚した。京二は手を払いのけると彼の頬を殴った。水がはねたのに怒ったという風にしてもよかった。彼はよくて腰を落とした。セーターは濡れた。

教師の嬉しそうな馴れ馴れしい表情に言い知れぬ嫌悪感を持ったのだった。しかも見上げる彼の表情からまだ懐かしさが消えない。殴られるのをまるで喜んでいようだった。

京二はその時ふと祖父の顔を思い出した。幼児の頃はいつも祖父と風呂に入ったものだった。嬉しそうな優しい表情はまだ浮かんでくる。わきの下をくすぐられると声を出して笑ったのだった。また美味しいと言って体中を舐められた。転げまわって逃げながら、皺くちなな手と体で包まれたもの

だった。しかしはつきりした記憶はないが舐められながら楽しかったものの、気持ちの悪いことがあった気もする。もう風呂と一緒に入らなくなった時に思ったのは、自分はどこを舐められたのか、下半身や性器まで彼は口をつけて吸ったのではないか、ということだった。深くは考えないようにしていた。

その嫌な感じがふと蘇ってきて京二は教師の肩を蹴った。

ドビュッシー、シューマン、ショパンなどの小曲などは問題なく弾けるようになって、いまはシューベルトの即興曲集に挑戦していた。

音楽に没頭していることは、現実と全くの別世界にいる事だった。激しい空手の練習では、疲れると下腹から沸き起こってくる欲情に耐えきれないこともあった。しかし音楽の世界では、練習への熱中は煌びやかな粉末のように辺りに発散した。また闇の中の舞う花びらが微かな光を受けているように静かだった。

京二はピアノ教師が彼の才能を認めているのを知っていた。しかしそれは幼児期から相当に鍛錬しなければ本物の音楽家になれない。彼にその気はなかったし、教師にも育てる力はなかった。そして彼の弾くソナタの音に哀しみが溢れるのはその痛々しい手のせいでないのだけは分かっていた。

夏になっても教師はブラウスのボタンを首まで詰めていたが、かすかな香水の混ざった体臭を消すことはできなかった。



美しい女性ではなかったが、彼には胸のふくらみとその揺れから目を逸らすことは難しかった。教師の素振りが妙に彼を追い詰めようとしているのではないかと気になった時、彼は教室をやめて自宅のピアノに向かうことにした。そして自作の即興曲を弾いて次々に忘れた。

夜の公園に座っていると気持ちは落ち着いた。今まで人がいて、いなくなったというのが何故か懐かしく安心感になった。考えることはなく風が心地よかった。中学校の同窓生の一人に会うと、彼は思わず友人に見せたことのない笑顔を見せた。たがいに喋ることはなかったが、公園の入口に50CCのバイクを止めて男がそばを離れて姿を消した時、二人の目が合った。二人は鍵のかかったままのバイクに乗り急発進させた。適当な運転操作で当てもなく走った。笑い声が夜風を切った。

街中から県道から川べりから他の公園などを一時間ほど走り回つてもとの公園に戻った。バイクをそのまま元のところにおいて二人は別れた。愉快的時間だった。

その友人がしばらくして女友達を連れてきた。近くの食堂で働いているらしい。アイスクリームを食べ終わって彼女は木立の草むらに横になった。友人と京二は続けて性行為をした。彼は初めてだった。そして自動販売機でコーラを買ってきて二人に渡して帰った。

またバイクが手に入った。同じコースを走り周り飽きたら

ずに足を延ばした。市の外れに大きな溜め池があった。二人の意見は一致していた。草の斜面にバイクだけを走らせた。それは倒れて滑って行って水に沈んで止まった。水紋が月の光に揺れて広がった。

一週間後に警察が学校に来た。彼は詰問されたが黙っていた。保護者が学校に呼び出されたが、祖父母は高齢で外出は控えているということになっていた。代わりに叔母ということで家政婦が来た。彼女は教師の叱責に泣いた。罰は二週間の登校禁止自宅謹慎だった。

自宅では祖父が軽蔑の眼でしか彼を見なかった。それは同情になり諦めの様子を見せ始め遂には無視になった。祖母は後ろに隠れて眼を合わせようとしなかった。彼は口を閉ざしたまま平然と過ごした。食事はいつもよりたくさん摂った。

空手道場には通ったが、熱心な練習は飽いた。かつての緊張の心地よさは感じられなくなった。他に行くところもなく、結局は家で寝転んだりするしかなかった。祖父母は彼を避けていたし、気にしなければ静かだった。その無為の時間の流れに身を委ねることは、日頃の底に眠っていて、時折り燃え上がつてきそうな訳の分からない怒りや悲しみを忘れさせてくれた。自分の存在が漂っている今の静かな空気が現実で、それを意識する自分は永遠に残ると思われた。

自然に指は鍵盤をなぞった。それはセレナードでありノクターンだった。まわりは外の世界と遮断された柔らかな涼し

い薄闇だった。今この瞬間に死んでしまえば、自死すれば存在は永遠だ、と無意識のうちにそんな言葉が出てきた。

ピアノのある居間から離れの煉瓦作りの祖父の書斎が見えた。葛が真っ赤になつてそれを覆っている。出てきた祖父は廊下を歩きながらピアノの傍に居る京二を見たが黙つて通り過ぎた。茶でも飲んだのだろう、書斎に戻りかけに、うるさいな、と小さくつぶやいた。しばらく京二は黙つて鍵盤を見ていた。空白の頭に錆びた金属が刺し込まれたようだった。

爆発音のようなピアノのメロディが鳴つた。むしろ気持ちのいいほどの激流の旋律が、叫び声のようにピアノから迸り出した。祖父への怒りではなく、この瞬間に飛び立とうとする気持ちの高まりだった。彼はその即興の曲に熱中して傍に祖父が来たのに気がつかなかつた。

うるさい、と叫んで祖父は楽譜を破り捨てようとしながらできず、それを鍵盤に叩きつけて逃げるように書斎に戻つた。祖父の着物から流れる空気には腐臭が漂つた。曲は止まつた。京二は自分は冷静だと思つて祖父の部屋に入った。古本の皮表紙と繻の匂いが満ちている。明り取りの窓から光線が指し込んで埃の舞い上がつた様を見せていた。電気スタンドの光の前に小さな肩を落として祖父が座っている。数行書かれた原稿用紙が目に入った。幼い頃、祖父の膝に座つて目の前の原稿用紙を破つて甘えた時は、祖父も喜んで一緒に破つたものだった。

京二はその一枚を剥いで破つて床にたたきつけた。祖父は

立ち上がつて叫びながら京二の頬を打つた。祖父の顔が怒りに満ちていればまだよかつた。彼にはそれが悲しみ溢れているように見えた。京二も祖父の顔を打つた。血が噴き出るのを感じられた。

彼が口を閉ざすと開かせることは難しかった。少年鑑別所では、知的障害ではないが、情緒不安定でやや異常という性格に決められた。そのあと家庭裁判所から保護処分として少年院に送致されてしばらく過ごすことになった。ずっと口を閉ざしたままだった。第一種少年院の短期処遇だったので半年の生活でよかつた。

起床から就寝まで時間通りに決められた生活は別に嫌ではなかつた。生活指導、職業指導、教科、体育、特別活動など一日のスケジュールは決まつている。職業指導では自転車からバイクの修理までを習つた。教科は簡単すぎた。特別活動の社会貢献で老人ホームの介護の手伝いをした。ピアノを弾いて喜ばれた。一度祖母が差し入れのお菓子を持つて面会に来たが会わなかつた。

当然少年院の新入りには苛めの洗礼がある。彼の美形は十分に虐める価値はあつた。食堂ではテーブルのプレートに隣の者がお茶をわざとこぼした。次の日は他の者がコップの水をこぼした。何回か続いたが京二は構わず食事をして彼らを無視した。料理のプレートを運ぶ彼の脚をひっかけようとした者は逆に足を踏まれた。

体育の時間に機嫌の悪かった教官が全員に二百回の腕立て伏せを命じた時、最後まで続けたのは京二だけだった。しかもまだ続ける余裕は残っていた。仲間は苛めを止めた。就寝前のテレビの時間の娯楽ではみんなで笑った。

ふと自宅の部屋でぼんやり過ごしていたことを思い出すこともあった。何の制約も目的も義務もなく、ただその時間に漂っている心地よさ。何の役にも立たない、無用の無視された存在。それが懐かしい。今は時間毎にその制約や目的や義務に縛られてはいるが、やはりそこに漂う何の役にも立たない無用の身がかつてと同じに思われるのが懐かしいのだった。

逆の環境にありながら同じような心地よさを感じるのが不思議だった。欲しいものや希望があるわけでもないのに、不安のない充実した時間とそれに流されて行くのもまた安らかな現実だった。

期間を終えて退院してきた彼を、祖父は友人の白翁に託した。独り住まいの白翁に、寂しかろう、用心棒にもなる、と声をかけた。白翁は狂雉を知っていた。二人に面識はあった。彼は男色であったが、もうその歳では力も衰えていて、またただの愛玩動物を飼うという高慢さなどもなかった。彼の清い若さと特異な感覚に興味を持ったのだった。だが実のところは誰も分からない。二人が満足そうに毎日を過ごしていることは確かだった。

京二の欲するものはすべて与え、やりたいことはすべて許

すつもりだった。多少の問題を起こしてもたいした迷惑にもならないし、悪業で大きな罪を犯すこともない。

自分で見つけてきた仕事はオートバイの修理工場勤務だった。熱心に勉強し修理を完璧に覚えた。夜はナイトクラブでピアノを弾いた。ジャズやソウルやロックも好んで聴いた。ヒップホップダンスやブレイクダンスも覚えた。女性の誘惑は多く、時にはそれに応えたが深入りすることはなかった。冷静さ、無関心の冷たい態度はまたそれも魅力だった。

暮れなずんでいく眼下の市内の光景と、遠い海に落ちる霞のような夕陽を見ながら聴く京二のソナタとセレナードは至極のものだった。琥珀のブランドデーは濃く深い甘さに満ちていた。白翁のそばでは老いた家政婦が正座して目を閉じて聴いていた。

白翁は京二の願いどおりに大型のオートバイを買ってやった。百キロ、二百キロほどを走るのが日課になった。時にはどこまで行ったか告げずに、遅くなつて帰り、名の知らぬ高山植物の花を摘んで土産に持って帰ってきたりした。

仲間に入らないかと誘うグループもあったが即時に断った。風に満ちた風景であれ、得体の知れない闇であれ、それを突き進む先の焦点はやはり光であった。光の空間が次々に溢れ出しこちらへ向かってきた。襲ってくる清冽な光を浴びて彼は疾駆した。無音の真空は鼓膜を切り裂いた。叫びを上げる欲求はなかった。煌めく虚空を走り抜ける彼は一個の沈黙という物体だった。彼は漆黒の鉄塊の光沢に同化した。

モノや人の名前を忘れる事が多くなったのは歳のせいではない。よく知った顔なのに誰だか思い出せない。またそんな中で忘れていた人や出来事に会っても、懐かしむ余裕がなければそれは苦しみの再来になる。忘れてしまおうとして意識の外にやっと押し出したのに、懐かしさが蘇る嬉しさと、嫌な予感も同時に浮き出てくる。

私の二度目の「マルゴの会」は詩人Tの卓話だった。二度目の会合でやっと私は認められ、それぞれが紹介された。東田さんから前もって聞いていたメンバーは私の想像通りだった。写真家、元脳外科教授、元天文学教授、が歳をとって白髪や髭のいかにも余裕のあるという風貌だった。他にサラリーマン風の紳士や落ち着いた中年の女性がいた。私も元仏文学の教授と紹介された。すぐに専門を聞かれ、ランボーやヴィヨンなど異端児詩人だと告げると、いくつか質問が浴びせられた。応えようと彼らの理解は早く私はすぐに打ち解けた。遅れて詩人のTが入ってきた。髪を整えて浅黒い顔でジーンズをはいている。まだ私より十歳以上若く太り気味で生意気そうだ。父親の不動産の会社を引き継いだが、今はほとんど仕事をしていないという。彼がどんな詩を書いているか知らない。私がランボーに関する小論を書いていたのを知って

いて、エチオピアに珈琲豆を買いに行っている、かの男が先日どこかの空港で急死したと告げた。同席者たちは驚いた。彼に女性が同伴してきた。白翁の学院の教師で、白翁が要望した音楽家だった。教養課程でピアノと声楽を教えているらしい。

年のころは四十代だろうか、髪は美容院などいつも通うというでもない無難作ぶりだが清潔感があり、色白のやや疲れたような力のない目元はむしろ私には美しく見えた。いや美しいというより懐かしい雰囲気があった。また形のいい唇をしていた。詩人の紹介に微笑むのに、私には悲しげな表情に思われたのは何故だったのか。小柄でもない後姿はまだ初老というには早すぎたが、やはり若い女性というものではなかった。しかし私にはそこに若い頃の姿が見えるような気がした。そして薄いページジュの衣服の中の肉体を感じた。

彼女には以前会ったことがあるかもしれないが、よく思い出せない。私は記憶力の低下を感じた。懐かしいのに思い出せない。思い出したくないとでもいう風に、思い出そうとすると不安が湧き上がって来て私の考えを止めた。

詩人Tが口を開いた。

「まずロマン派音楽を味わってください。と言ってもドイツ風とフランス風の違いを、まあどちらもそう変わりませんが折角だから今日は坂口千恵子先生にピアノ演奏をお願いしています。それから来年没後百年を迎えるガブリエル・フォーレの生涯と音楽を紹介します」

曲はシューベルトのソナタ二十一番とシヨパンのノクターン二十番だった。どちらも私の好きな曲、時には聞きながら涙ぐむこともある曲だった。

決して豊かでもない髪はメロデーと強弱に乗って微かに揺れ、肩から腕へと流れるような体の動きは、その美しさを隠しながらも、少しずつ滲みでてこようとしているのを、留めることができないかのようだ。その身体の魅力は私にしかわからないものだ。それを見るだけでどうすることもできないという焦燥が私を苦しめはじめた。私は感動し悲しくなった。

冷たく澄み切った泉の底に抑え込まれた悲しみの泡がやつと浮き出して、水面に浮かび上がり月の光にさざ波のように揺れる、そんな音楽とでも言おうか。そのメロデーに合わせて彼女の身体が流れるのだが、それは再び悲しみを内部に閉じ込めようとしているようだ。この悲しみは秘密の美しさで決して誰にも理解できない。私はこみあげてくる甘い感情に気づくと、気持ちを抑えようと目を窓の外にそらした。曇ったその日は街の灯もまばらだった。私は冷静になろうとしてウイスキーを生そのままで何杯も煽った。

次にTがフォーレの生涯について話をしたが、私は酔ったふりで椅子に深く腰を埋め目を閉じていた。

部屋の電気が落とされ、フォーレのレクイエムが始まった。スピーカーは消え、音そのものが遠くの闇から襲ってきた。聴く者はその闇に吸い込まれながら昇っていき光を求めてさまよう。闇の中に間違いないく漂っている光があるのに、見えな

い。死者にならないとその恩恵に巡り合えないのだ。天上の隙間から漏れてくる微かな光が見えてくると死者は安心してそこに吸い込まれる。死の安息だ。何度も繰り返し闇が我々を誘う。そこに安らかな永遠の死があるならば何を躊躇することがあろう。美しいまま人間は亡ぶことができる、合唱者たちは悲痛なほどの声で訴える。

私は薄暗い中で千恵子の姿を探してすぐにわかったが、眼をそらした。

その日の料理は庭でのバーベキューだった。見慣れない肉は雉肉ということだった。甘い肉の匂いが涼しい夕風に漂った。

「うちで飼っている、雉です。ここではなく父の別荘で飼っています。僕は、京二ですが、狂雉ともいいます。狂った雉(きじ)です」

澄んだ声だ。分かるものは笑った。不良少年ぶった言い方に私はなぜか好感を持った。

私は鶏類があまり好きではなく、その上ウイスキーでのが渴いていたのでビールを飲んでお腹が膨れ食欲はなかった。軽く焼いたのをワサビ醤油で食べるとおいしい、と誰かが言っていた。私は千恵子が小さな肉片を口にすることを盗み見した。美しい唇だとまた思った。

「これは美味しい、生身が残っているタタキが特に旨い」とTがはしゃぎながら言った。肉は確かに濃いルビーのような

色だ。

「生きている雉を見たことはないな、今度は君の別荘で見せてくれ」

それを聞いて機嫌よさそうだった白翁が言った。

「じゃあ、今度はうちの岬のシャトーにしよう、二か月後、そうだ丁度、お彼岸がいい、九月だな、泊まっていけばいい」

そして次の卓話には私が指名された。私は了承した。

離れて街を見下ろしている千恵子の傍へ寄った。年寄りのごく自然な近寄り方だったので、彼女も当惑せず当たり前に微笑んだ。真正面から彼女に目を向ける事はできなかった。私は緊張を隠していた。

「素晴らしい演奏でした。好きな曲です」とそれだけ言った。「昔若い頃、ヨーロッパなどを旅する時、街中を歩き回って疲れると、よく教会に入って休んでいました。前の椅子の背もたれに手を置いて頭をつけて昼寝するんです。祈っているようでしよう。ある時ふと目覚めると、周りに人がいっぱい、何事かと思っていると音楽隊が入って来て、合唱が始まりました。音楽会かどうかわかりませんが、何かの記念式典だったかも。まだぼんやりしている僕の頭に流れ込んできて、感動させたその音楽がフォーレのレクイエムだったのです。僕は欠伸のせいではなく、涙ぐんでいました。そのあと、皆は列を作って、司祭というのか坊さんの前に行き、一人ずつ十字

を切って煎餅のようなものを口に入れてもらっています。人が十字を切るのを真似して僕も並びました。煎餅の味は忘れませんでした。愉快でしたが、後で考えると、昔ならキリスト教を侮辱した異教者ということで、殺されたかも知れませんか」  
彼女が面白そうにフフフと小さな声で笑った。長い間忘れていた笑いとでもいうようだった。私は彼女の眼を垣間見るしかできなかった。彼女が笑うと夕風に仄かな香水が漂って私を打った。

帰りに気がついたが、その日もまたシャトー・マルゴの最初の一口の味をゆっくり味わえなかったのだ。

その日泥酔していた私は部屋に戻るとベッドに倒れ込み、夜中に目を覚ました。カーテンを閉めていない窓から氾濫するように月光がなだれ込んできて、部屋を真っ白な雪の平原にしていた。

頭痛のおかげで夢でないのはわかっていた。私は冷静になつていた。緊張が解けてすっかり力を失っているのに気付いたのだ。冷たい雪は私の意識をはつきりさせた。気付かないふりをして私は心の奥に立つ氷の棘になつて甘んじ悲しみを押しえつけていたのだ。忘れていたのも、感じまいとしていたもの、それらが溶けて流れ出すともう抑えようはなかった。煩悶して私は寝返りを打った。眼を閉じてもどこまでも白い雪は追ってきた。

今日の坂口千恵子の弾いたノクターンはもう六十年になるとする昔のノクターンの再来だった。私が初めて愛した女性の弾いた音楽の再来だった。今はもうあの由紀子の面影は薄れて思い浮かばない。しかしあの時の音楽と、私の悲しみ、決して叶えられないという苦しみ、それが今日蘇ってしまった。あの時の由紀子の表情を思い起こそうとすると、それは今日の千恵子の顔になる。

その由紀子を忘れようと、いやその想いを深く感じようとして、私は長い時間を潰して来たのだ。できうる限り下劣で無意味な性の世界に下りて行きたかった。泣きながら奈落の階段を一步一步降りていったのだ。性の喜びはなかった。後ろめたい罪のような快感もいまではもう霞のように消えた。私の生涯はそれでいいはずだった。

そして私はまた知っていた。現実に出会ってしまった由紀子の面影、それが千恵子に蘇ったとしても、今更何もできない。私は老いてしまった。時間や制約に縛られない今の自分が想いを告げても、返ってくるのは侮蔑しかないだろう。もし私の想いが伝わっても、この痩せた腕と皺だらけの下腹でどうやって彼女を愛撫することができるだろう。少年のように彼女の胸に顔を埋めて満足するか、老人の見つともない醜さ、恥さらし。また昔のように我を忘れるために不潔な外界をさ迷うことができるのか。さらさらした粉のような砂浜を私は今喘ぎながら歩くしかない。

白翁のシャトーというのは、市内から車で西へ二時間ほどの海辺にある岬の中腹に建てられた学院の元研修所だった。特別室のほかに十室の小部屋があつて、他に数十人が泊まれる相部屋がある。最近はまだあまり使われることもなく、白翁の友人などが籠つて仕事をする時や、その家族の休暇などに使われている。いずれも空いていて白翁の了承があればいい。管理は近くの漁民に任されて、宿泊者の世話もする。坂道を降りて行けば途中に雉小屋がありその飼育も漁民に委託されている。さらに下ると小さな入り江のきれいな砂浜にでる。数件の漁民の家があるが、民宿などなく人は少ない。

岬の付け根には県道が走っている。県道はまだ開発されていない自然の山を切り開いたもので、絶景の海を見下ろすドライブにはいいが、観光施設が少ないので車は多くない。時々暴走するものもある。それでも一日に数本はバスが田舎の駅から廻つて来る。それが東田さんの説明だった。

白翁は東田さんの車、千恵子は詩人と、他はそれぞれの車で岬へ向かった。私は車中での会話が面倒で本数の少ない鉄道で向かった。

私はその岬を知っていた。もう二十年になるか三十年前になるか記憶はないが、ある若い詩人の事だった。彼の詩は今でも何篇か記憶にある。

・ ・ ・ ・ ・  
この室の

蒼い、蒼い眩惑の底に、

降りかかるこの憂さの中に、

私は眠りを貪っている

・ ・ ・ ・ ・

私はある日珍しくもない元素になつて

重いメランコリーの底に沈んでしまつてであらう

得体の知れないこのひと時の衰えよ

身動きできない疲れが

筋肉のあたりを延びていく

・ ・ ・ ・ ・  
この時、薔薇の花

紅く煌めく

紅より

闇へ

・ ・ ・ ・ ・

私は鮮やかな紅を見た。

若い月明りの中にくづれる花を見た。

・ ・ ・ ・ ・

去らば、去らば、わが慕う光よ、去らば

至上の告別は微笑の認識である

・ ・ ・ ・ ・

夢魔にうなされるような私のか碧い生活の淵にも、時々、幽

妙な光が白んで煌めいた。幽玄と酷簿との海に溺れて、私の紅い祈祷と生命の秘鍵とは永久に沈み入るだろう。・ ・ ・

当時私は中年を過ぎようとした、いや老年に入りかけていたのか、その詩のような疲労、倦怠、メランコリーに襲われていた。現代にしては多少古臭い詩だが、それは私の無為なる日々を代弁してくれたかのようだった。

だがそれは私の代弁ではなく、私の感情の同伴者でもなく、いきなり未知の世界へと遁走したのだった。ある夏彼はこの岬の下の入り江から沖へ向かつて泳いでいき戻つてこなかった。死体は見つからなかった。事故だったのか、自殺だったのかは分からないままだった。

恋人との心中未遂だったとか、別れ話だったとか、貧しい家庭を抱えて大学を辞めなければならなかったとか、ただの水難だったとかいろいろな話がだがすぐに消えてしまった。私はやり場のない淋しさを抱えたまま老年の世界に沈下していったのだった。

単線の駅を降りると私は徒歩で岬へ向つた。彼が歩いたであろう道、あるいは彼等だったかもしれない道。彼岸の中日とは言え、それも午前中というのにまだ太陽は強かった。石ころだらけの坂道の途中で海の紺碧が目には溢れた。遠く見下ろすと岬が見えた。詩人と、あるいはその二人はどんな気持ちでこの道を下つたのか。この雄大な美しい光の光景は、彼



等の悲しみや疲労や無気力をむしる加速させたのか。哀しみの冷たい暗い世界への道だったのか。あるいは美しさに若い声をあげながら坂道を走ったのか。

周囲の岩に狂奔する蒼ざめた水の遊戯に囲まれる。幻惑は私に沈黙を許さず驚異を強いる。おお至るところの限られた幻惑・・・時には生と死の争力を現じる魔の海が湧きたつていく。

そして彼は未知の果てへ去ってしまった。中年の私にいく篇かの詩を残し、戸惑う私を侮蔑したように消えていったのだ。私は生き永らえ、私の中には嘲笑を浮かべた彼しか存在しない。今は彼の詩を覚えている人は少ないだろう。

私はその頃の自分のことを言いたくなくなつたし、詩人の事は言わないつもりだった。

研修所とは言いながら大きなログハウスだった。大小の宿泊室のほかは海に面した白翁の部屋や特別室があり、特徴はやはり中央の講堂のような広間だった。グランドピアノもあり、近くの中学校が廃校になった時、頼まれて引き取つたということだった。

海へ向かつて降りていく丘の中腹だった。周りは雑木の木立や深い草むらで風は結構強い。前庭からはまさに百八十度の海が広がっている。大きく迫つて来る海を長時間見つめる

ことはできない。

それぞれが割り当てられた部屋に入り、夕方まで自由に過ごすことになった。

早速Tの誘いで雉小屋を見に行くことになった。希望者は私だけだった。彼は今日を楽しみにしていたと言って、赤いTシャツを着ていた。ハウスを少し下り横に折れると、木立と深い雑草の中に小屋があつた。高さ二メートル横三メートルほどの金網に三羽の雉が土を突いたりして動き回っている。鶏よりも少し大きい。赤い顔から嘴が突き出している。緑の光沢のある背中が美しい。一羽が大きく羽を広げTを威嚇するように形のいい羽を広げた。一瞬怖れたTは後ろへ下がりがら言つた。

「さすが、国鳥だ、ゴージャスだな、お前をまた食つてやるからな」

「赤いものには向かつていくのです、ちよつと待つてください」

と言つて狂雉が言つて傍を離れた。

「桃太郎の話のおかげでこれは国鳥になつたのですよ」照れ隠しに彼は言いながら辺りを回つていた。

しばらくして狂雉が戻つてきた。腕に紐のようなものを捲いてる。よく見ると細い蛇だ。頭は潰されている。彼は無雑作にそれを籠に投げ込んだ。雉が競つてそれに飛び掛かつて啄む。蛇はくねつているが数分もすると食われて無くなつてしまった。

「蛇、ネズミ、蜘蛛、蜥蜴、ムカデ、蝮などが好物です。おかげで肉が美味しくなります」

Tは一瞬意識を失ったかのように目を宙に浮かせ黙ってしまつた。

私は部屋に戻つて今日の準備しておいた卓話の復習をした。白翁の希望で、たまには文学の話を書きたい、ということに私になつたらしい。話す内容用紙に書いてあるのでそれを渡せばいい。あとは気ままに進めるだけだ。時間は十分あつたので私はウイスキーを何杯か飲んで横になつていた。窓からハウスの前の前庭の一部と少しの海が見えた。夕日を眺めるために外に出るにはまだ時間はある。各部屋のエアコンはないが窓からの風が心地よくいつの間にか眠ってしまった。

目覚めた時は夕日が沈む寸前だつた。窓から身を乗り出してやつと海を見ると、まだ昼寝ではつきりしない頭に強烈に入り込んできたのは完全な球体の巨大な真紅の太陽だつた。空が真っ青に見えたのは幻覚だろう。もう少し遅れていたら見ることはできなかつた。燃えるような球体は水平線に接触すると、あとは急直下で激しく沈んでいった。

その前に小さく佇んでいた後姿は千恵子だつた。手を胸に当てて祈るような姿だ。私は誰がいるかとも考えずに階段を駆け下り庭に出て彼女のそばへ近寄つた。彼女はまだ祈つていた。細い雲が何条かたなびき、空全体はうすい蔷薇色におおわれていた。それが次第に錆色になり濃い茶色の雲に占め

られてくる。

彼女は私に気づいてもまだ放心状態のようだつた。私は悪いことをしたような気持だつたが、彼女がそのまま立ち去ろうとしないのにほつとした。だが私は失敗した。何か言わねばならない気がしてつもらぬことを言つてしまつた。

「何か祈つていましたか。今日の夕日は格別に美しかったです。今日、彼岸の中日に沈む夕日、真西に沈む夕日に祈ると、亡き愛する人の声が聞こえるという伝説があります。西方浄土からの声です。僕はいつもそう思うのですが、今日は昼寝が長すぎた」

彼女の眼が一瞬光つたのは私への怒りだつたか侮蔑だつたか。気まずい私は黙つて海に目を向けていた。一面の重い空の隙間に水色の美しい隙間が見えた。

「夕陽が落ちた後もきれいですね」

彼女がええ、と答えるのが微かに感じられて私は安心した。それで思い切つて昨日から考えていたことを言つた。

「今日は僕が卓話をします。その後にお願ひですが、一曲歌つてくれませんか、フォーレのアプレ アン レーヴ、ゆめのあとに」

「今日は、文学の話をしろと言われました。それで小説や和歌や芝居などに描かれた恋の話にしようと思ひます。恋と言つても、初恋、情熱の恋、失恋、暴力、邪、恨み、嫉妬、金権力、変態、妄想、ささやかな恋などいろいろですが、今日

は悲しく美しい、忍ぶ恋、をテーマにします。第一章が西洋文学の恋、第二章が日本の和歌や芝居の恋、第三章がそのほかです。この資料を渡します」

まだ完全に日は落ちていなかったが、陰鬱な赤黒い空が漆黒に沈んでしまった海の上に広がっている。時には涙が浮かびそうになる小説や歌の場面をうまくしゃべることが出来るかどうかかわからない。

私はもう考えずにただ喋り続けることにした。

劍豪で人格者でもあり醜い顔のシラノ・ド・ベルジュラックは従妹のロクサーヌを秘かに愛しているが、彼女を恋する弟分の男に代わって彼女に手紙を書いてやる。二人はその手紙のすばらしさで愛し合うのだが、シラノは自分を抑えた辛い忍ぶ恋に耐えるしかない。最後に陰謀に会って死にかけてシラノはロクサーヌの腕の中で息を引き取るが、その時、彼が代筆していた手紙の詩句を暗唱してしまう。ロクサーヌは本当に自分を愛していたのは誰かを知る。

ジャン・バルジャンは孤児コゼットを引き取り育てる。彼は様々な苦難の運命を乗り越えてコゼットを守る。彼女は美しくなり恋人マリウスと愛し合うようになる。一人で老いた彼は無意識のうちにコゼットを女性としても愛しているのに気が付く。だがどうしようもない。二人に看取られて初めて安らかに彼は死ぬ。

バルザックの「谷間の百合」はモルソー伯爵夫人が後見人になっている若者にいつの間にか恋をしてしまい病に陥り

苦しむ。それを告白もできない。告白できたのは死の直前だった。バルベールの「滅びざるもの」の気高いスキュドモール伯爵夫人の叶えられぬ恋。同時に訪れて来る愛と不幸。

しのぶれど色に出にけりわが恋はものや思うと人の問うなり

平兼盛という貴族の歌会における一種のざれ歌。百人一首の一首で代表的な忍ぶ恋。

玉の緒よ絶えねば絶えねながらえば忍ぶることのよわりもぞする

式子内親王、これも百人一首で新古今集の女性の歌です。忍ぶ恋のあまり死んでもかまわないという激しい歌。真実の恋。

能でもよく忍ぶ恋は演じられる。「綾鼓」「恋重荷」などは下積みの醜い老人が殿上の貴婦人に一目会いたいと願うが叶えられるはずもなく、からかわれて死んでしまう。魂は成仏できないまま迷っているのだがやがて折伏される。

西行は一度御簾の間から垣間見た上臈夫人の姿に恋をして叶えられぬ苦悩に死にそうになり、地位と家族を捨てて放浪の旅へ出る。

無法松は主人の妻、未亡人になった妻に恋心を抱くが、最初から諦めて求めてはいない。それがまた哀しい。

有島武郎の小説で、慕う女主人を想いのあまり打つ、その手を彼は斧でたたき切る。誰もが叶えられぬ恋に苦しんでいる。

しかし女性は我慢ができない。八百屋お七は会いたい気持ちを抑えきれずに火をつける。

六条御息所の思いつめた恋は遂に怨霊になつて葵の上を苦しめる。

その点、男は弱い。ドストエフスキーの長編「未成年」では、インテリ貴族の主人公が、「中途では詳しく書かれていないが、長い間、秘かに思う女性がいて、それも激しい情欲を伴つたものだが」最後にその女性が軽蔑する男との婚約を知ると発狂して、ドタバタの末、氣を失つた女性をピストルで撃とうとし、自分も死のうとするが、果たせない。あとはしばらく痴呆状態に陥る。「白痴」のロゴージンしかり。

「罪と罰」では非業不道徳人のスヴィドリガイロフは思いを寄せるラスコーリニコフの妹のドーニヤに關係を迫るが、叶えられずピストルで自分を撃つてくれと頼むも、果ては逃げられピストルで自分を撃つ。

若きウエルテルは最後まで耐えることができなくなり自死する。彼の手記は共感した読者の涙を誘う。

「彼女は感じてゐる。僕がどんなに苦しみに耐えているかを。今日の彼女の眼は僕の心の底まで沁みた。彼女は一人だった。僕は何も言わなかった。彼女は僕を見つめた。彼女は美しいか。どうして僕は彼女の足元に身を投げ出せないのか。

か。その首にすがりついて限りない接吻を浴びせられないのか。ロツテはピアノに身を避けた。そして弾きながら低い美しい声で囁くように唄った。ロツテの唇がその時ほど魅惑をたたえていたのを見た事はない、その唇は、喘ぐように開いて……ああ、人間は僕以前にもこれほど惨めだったことがあるだろうか……」

嫉妬、叶えられぬ愛への絶望、あらゆる苦悩がウエルテルの心の壁を掻きむしり惨酷に食ひ込む。その周りを虚しい空つ風が吹きすさぶ。

かつて彼女と散歩した道に立つ。

「今僕は一人の老婆のように座っている。死に向かつて衰えていく喜びのない生命を一瞬でも長引かせるため、よその家々の戸口に立つてパンを乞う老婆のように……」

「ロツテ、ロツテ、僕はもう終わりだ。感覚が乱れもう考える力を失っている。眼は涙に溢れる。何処へ行つても同じだ。それでいいのだ。何も願わず、何も望まない。僕は去つた方がいいのだ」

「アルベルト、君に済まないことをした、だが許してくれ、君の家庭の平和を乱し……」

「ロツテ、なろうことならあなたのために命を捨てて、あなたのためにこの命を捧げるといふ幸福に恵まれたかった……こんなにも冷静にこんなにもたじろがず、死の鉄の門をたたくことができるとは……。私はこの服装のまま葬られたい。ロツテ、あなたが触れて神聖にしてくださいました着物

です……。弾は込めてあります。十二時が打ちます。では、ロツテ、ロツテ、さようなら、さようなら」

私は声を詰まらせながら読んだ。同時代の絶望した青年たちがこれを読んで自死していったのを感じることが出来る。

また一九三〇年代のヨーロッパ、パリに流行ったシャンソン「暗い日曜日」は男の弱さをもろに描いている。日曜日の夜中、花束を抱えて自分の部屋に戻り失意の男が自殺する。

暗き部屋に花を持ちて ただ一人虚しく帰る

今は冷めし君がこころ われは唄う恋の嘆き

暗き部屋にむせび泣けば 黒き影のすでにさだめ

ソンプル・ディマンシユ 暗い日曜日

このシャンソンも、絶望した若者が影響を受けて自殺するのが流行ったとかで、暗い日曜日は放送禁止になりました。ハンガリー出身のダミアという歌手が唄っている。

他にもたくさんあるがきりがないと私は最後にまとめた。

「色々話しましたが、古今東西、恋は苦しく美しい、当たり前前の結論でした。一つ、私の好きな俳句があります。短い言葉ですべての恋の苦しみを表現しています。

老いが恋忘れんとすれば時雨かな

与謝蕪村です。若い娘に心を奪われそうになり我慢したの

です」

「最後に、坂口千恵子先生に一曲お願いしています。先日の方オーレの作曲の、ゆめのあとに、です。これは夢の中で優雅に飛びまわっていた恋人が、夢から覚めるとすべてを失い絶望して嘆く、という歌です。私には悲しい忍ぶ恋の歌に聞こえる好きな曲です」

室内は小さな雪洞だけの光になり、外は暗黒の闇の果ての海が感じられた。突然だったので狂雉が楽譜を探してきて、捲りながらそばの千恵子と何やら話している。私は彼女が快く承諾してくれたのが嬉しく、狂雉と並んでいる姿にも好感を持つていた。

やがて狂雉のピアノに続いて千恵子の澄み切った声が室内に響いた。その悲しみの一声から私の胸は詰まった。

あなたの姿に魅了される眠りの中

僕は幸せな夢を見た 燃えるような幻想を

あなたの眼はより優しく 声は純粋に広がった

あなたは夜明けに照らされる空のように輝いていた

あなたが呼ぶと僕はこの地を離れ

あなたと一緒に光の先へ飛び立った

天空は私たちのために雲を開き

見たこともない輝き 神聖な光があふれ

ああ 悲しい夢からの苦い目覚めよ

夜よ 僕は呼びとめる あなたの幻想をひきとめようと  
戻つておいで輝かしいものよ 戻つておいで神秘の夜よ

歳をとると涙もろくなる。喉の奥、後頭部から涙が湧き上がつてきて眼に充滿した。歌う人は夢の中に戻り、その中で死を望んでいるかのようだ。それは悲しい。だが悲しみはなぜこも美しいのか。私は生きてきた現実を捨てて今からその夢に自らを投げ込んでいきたい。いやかつての私も過去も夢の中に生きていた気もする。私は瞑想にふけり混乱する頭を振り、力を入れようとしましたがますます膨らんでくるものが胸を侵していた。手元にあつた酒はカルバドスのようだ。強く苦い褐色の酒は意識をはつきりさせるどころか私をさらに朦朧とさせた。

千恵子の歌は幸せな夢から覚めて嘆くのではなく、悲しい夢から覚めて、また新しい悲しみに陥るのを欲しているように思えた。その想いが張り裂けそうになつた胸を震わせている。

私はあることをふと思いつくと愕然とした。私を一頃悩ませた、三十年前のあの詩人の恋人は千恵子ではなかつたか。詩人を一人で昏い海のその果てまで行かせたのは彼女ではなかつたか。彼女も一緒に海へ向かおうとしたかどうかは分からない。今日、沈みゆく西日に祈りを捧げていた時、心中の

相手の声が聞こえたのではないか。多分私の勝手な想像に違いない。歌が終わつても私は余韻に浸つたまま酒を続けた。

その日は管理人の料理でふんだんに魚の刺身が盛られていた。楽しい音楽でもなかつたので、宴会は静かに始まつて盛り上がらないままだつた。酒の強くない天文学者は写真家を誘つて芝生に出て、星座の説明をしている。白翁と東田さんは何か話しながら魚をつついていっている。私は千恵子と狂雉がピノの前で話し込んでいのに何度も目を向けた。何も考えずにその様を見ていると嫉妬は起きなかつた。ただ千恵子の姿がだんだん儚く見えてくるのがいたたまれなかつた。

狂雉がピアノを弾き始めた。私の好きな曲、ドボルザークのスラブ舞曲、若い頃に一度、深夜放送で聴いた曲だ。東欧の田舎の村の舞踏会、私の印象では何故かそこに雨が降っている。その時は哀愁を帯びたヴァイオリンの曲だつた。続いてブラームスのハンガリー舞曲。

狂雉は私の心を見透かしているような選曲をする。だんだん興が乗ってきたのか、ピアノの音が早くなり、トルコ行進曲になつた。それが激しくなつてきたと思つたら、千恵子がいづの間にピアノの狂雉の横に座つて一緒に弾いている。戦いに向かう行進なのに哀愁を帯びている。いつまでも続くようだったが、その連弾は私の知らない曲に代わつて静かなバラードになつて続いた。終わりのない流れは、二人の即興曲になつたのかもしれない。誰もが目を閉じて聴いている。

ピアノが終わっても誰もそれが分からないとでもいうように口も開かずに拍手もなかった。

雪洞の明かりは一つを残して消えた。外から夜の光が射しこんできた。透き通った高い声が部屋の四隅のスピーカーから突然流れてきて静寂を破った。黒人の声だろうか。誰もが何が起こったのか分からないまま美しい声に驚いた。

また私の好きな曲だった。マービン・ゲイ、六〇〜七〇年代に活躍したアメリカのソウル黒人歌手だ。悲しいうわさ、御子に救いを、無の叫び、など曲は知っているが歌詞はよく分からない。

敬虔な牧師の長男で可愛がられ過ぎて、愛情過多の嫉も厳しく一種の精神的虐待を受けたといえる。それを逃れて生きることが彼にとつては音楽でしか叶えられない。また歌えば歌うだけ、果てはなく恋人の死を迎えても歌わざるを得ない。やがてドラッグに溺れ、父親との諍いで、四十五歳の時父親にピストルで殺される。最後の言葉は、パパ愛してるよ、だった。その宿命を予感させるような純粋な高い声は夕空を昇っていく。澄み切った声は水の刃のように鋭い。哀しみに胸が張り裂けそうだが、一瞬の光に触れて脆く消える。哀しみの極みはただの空間に昇華するだけだ。

今日の私のつたない話と魚料理とクラシック音楽の不釣り合いの時間の流れを打ち破るようだった。みな疲れていたのだろうそのまま動けずにいる。誰もが束縛から解放され自由に飛び立とうと欲するが、反面それを無意識のうちに、自ら

拒否しようとするのに気付き唾然とする。そして疲れ果てる。そんなベッドの暗闇がまつているがそれはまた安息でもある。それに早く陥ってしまったのに身体が動かない。

だが、狂雉の熱量はまだ尽きてはいなかった。彼は踊り始めた。黒い短パンとTシャツで踊る肢体に長い髪が揺れる。表情は見えない。マービン・ゲイの音楽のテンポが速くなり、それに合わせてヒップホップやブレイクダンスもどきの動きで勝手に熱中している。身体をくねらせ、床に打ち付け、飛ばし、逆さになって回転する。空気と格闘し破れ逃げるが、すぐに逆襲する。それが彼の音楽に同調して躍動する。抑えつけていた感情が爆発するのは怒りでしかない。内部の愚劣なものを吐き出したい、そのために踊る。いや自分の肉体そのものが愚劣なのだ。踊りながら、そこから純粋な自分だけが逃げ出したい。長髪は嵐に揺れる棕櫚の葉群れのように激しく揺れ、垣間見る彼の瞳は深い澄んだ空虚でもはや何も見えない。収斂された己のエキスだけが昇天するのだ。だがそれは無駄なことだ。決してそれは叶えられない。だがそれは絶望ではない。宿命だ。無駄な、無意味な、無為の肉体に溺れるべきだ。解放が叶えられないならもつと激しく、もつと惨酷に己の愚劣に埋没すべきなのだ。

深酒をすると深夜に目覚めてあとは眠れない。寝苦しかった。

私は千恵子の事を考えはじめると、それはもう消えなかつ

た。沖へ遠く泳いで行って帰ってこなかった詩人が千恵子の恋人であったのが、私の勝手な想像であろうと、もうどうでもよかった。私の中ではそれは真実以外ではありえなくなっていた。三十年ほど前だと二人はまだ二十歳そこそこだろう。病気の父と貧困家族を養わねばならなかった彼の逃げるのはそこしかなかったのか。しかも大学まで止めなければならぬ。千恵子が手を貸したとしても及ばなかったのだろうか。いや千恵子は詩人を置いて去っていったのだ。彼にはもう絶望しか残っていない。いや、その頃千恵子にも深い悲しみがあつて、二人は心中しようとしたかもしれない。手を赤い紐で結んで一緒に沖へでていく。死んでも二人は離れない。しかし紐が途中で切れてしまつて、千恵子だけが救助された。いや単なる水難事故だったかもしれない。

夕日に向かつて手を合わせた千恵子には、西方からの詩人の声が聞こえたのだろうか。恨みの声だったか、現世を生きる彼女への祝福だったのか。

当時の私の気持ちを代弁してくれた詩人に、私はその死を悼むだけでどうしようもできなかった。昔の事だとして時間と共に忘れてしまった。そして千恵子は、私が唯一恋をした女性を想い起させた。思い出だけを残して、その苦しみを忘れようとしていた長い時間だった。それも歳と共に霞になつて消えていこうとしていた。

悪夢のように様々な勝手な考えが纏いついて私は何度も寝返りを打った。

遠くで疾駆するオートバイの音が聞こえたと思つた時に、私はやつと浅い眠りに陥つていった。

「七」

私の手記はここで終わりにしたかつた。このあと私は厳しい現実に向き合うことになつたが、私はその厳しさをもう辛いものとは感じなかつた。歳と共に感受性が減つたということではない。歳の耄碌でもないだろう。捨て鉢な気持ちでどうでもいいと思つたのではない。私は現実をただそのままに受け入れる、いわば空気のような存在になつてしまつたのを感じていた。

翌日の昼近く、二台のバトカーが来て、階下が騒がしくなつた。降りてみると広間には白翁と東田さんが三人の警官を前にして座つていた。

この先の崖下の岩場で千恵子と狂雉の死体が見つかつた。救急車ですぐに運ばれたが助からなかつた。オートバイがガードレールを突き破つて事故を起こしたらしい。ハーレイ・ダビットソン一二五〇は崖のかなり下まで落ちていたが、モーターはかかつたままだった。特に事件性はないと思われるが、身元確認と検視に立ち会つてくれ、とのことだった。東田さんと白翁、詩人Tと脳外科の医者が、それぞれの車で遺体が安置されている町立病院へ向かつた。



私には驚きはなかつた。また夢の中にいるように現実感がなかつた。冷静になろうとしていたためでもなく、衝撃が大きすぎて感覚が麻痺していたのかも知れない。

二台の車を見送つた後、私は海へ行つて泳いだ。力のある限り沖へ行つてみたくなつた。疲れたのでしばらく浮かんで振り返つて見ると、遠くに岬とシャトー、その背後の山が見えた。右手奥の山が海へ落ちていく崖は岩が黒々と夏の日を浴びて光っている。小さな砂浜が金色で美しい。ふと、誰かの俳句が浮かんだ。

愛されずして沖を遠く泳ぐなり

誰からも愛されず、誰も愛しななければ、その存在は全く無価値なのだ。今の私はそうだろう。だが、私のこの無為な存在は海に浮かんでなんという心地よさだろう。背中がもう日に焼けていくようにまた気持ちがいい。私はなぜかこの上もない幸福感に満たされた。愛情云々などを考えることなく、私の肉体はただここに浮遊している。何か、煩雑なもの、私を惑わすもの、心に棘のように引つかかっているもの、怒り悲しみ、などが全て消えてしまった。長いようで短かつた私の人生に、暗い影のようにいつも付き纏つていた不安が、さつぱりと消えてしまった。私の足元は深い海だ。覗くと暗黒の限らない深淵が私を引きずり込もうとする。私はいつでもそこに身を投げ出すことができる気がする。私は孤独だ。そ

こに身を浸し仰ぎ見る太陽はそんなに眩くない。

私が軽い昼食をとっていると、四人が帰ってきた。白翁は後処理や手続きを東田さんに任せて帰ると言つて、淡々としている。葬儀屋に連絡すれば一応は済むが、オートバイの引き揚げは相当に面倒だろう。詩人Tは千恵子の親族を呼んでいるのでまだ残るらしい。今見たばかりの死人の表情がまだ消えないのだろう。落ち着きがなく不安そうに体を揺らしている。

「今更、慌てたり、悲しんでもどうにもなるまい」

白翁が冷たく詩人に言い放つた。

じゃあ、と言つて白翁は脳外科医師の車で帰つてしまった。私は誘われたが断つた。日に二本あるバスで駅まで戻るところにした。来た時に一応時間を見ていたのだ。

バス停は岬の付け根にある。時間まで四十分ほどあるが退屈はしない。私はそこに立つて周りを見た。県道を挟んだ裾野に雑木林がまばらにあり、それがかなり高い山が続いている。この辺りで雉がよく捕れると狂雉が言つていた。もう芒が秋の日を浴びて波打っている。

急カーブの多いこの県道を彼らは走つたのだ。愛し合った後、たつたのか、夜中どこまで走つたのか。千恵子は狂雉の背中に固く抱きつき、めつたに人に見せたことのない笑顔ではしゃいでいたのだろうか。あるいは死を決心した二人は真剣に暗闇を見つめて疾駆したのだろうか。ガードレールを打ち

破つて空中に飛んだとき、ライトは夜空に一閃ひらめいたことだろう。そして昏い海を激しく打つただろう。彼らは何を叫んだか。

振り返ると岬の先に紺碧の海が光っている。晴れ渡つた空との区別がつかないのは白熱した太陽の光のせいだ。眩しくて海を凝視することができない。静まり返つたこの晴れた空間。

単なるドライブの事故だったのか。同意の心中だったのか、狂雉の無理心中だったか、誰にも分らない。彼の自殺だったことは違いないと私は結論つけていた。理由は分からないがわかる気もする。私はあまり深く考えたくなかった。その覚悟と余裕はなかったし、歳と共に薄れていく記憶力のせいで、これから真剣に思い出すことはないかもしれない。

背後から芒のなびく音が聞こえて来る。まるでレクイエムのように。私自身への。

註 文中の詩 三富朽葉詩集より引用

「若きウエルテルの悩み」手塚富雄訳

俳句 藤田湘子